

ツェータ男爵の智謀（「メリー・ウィドウについての一考察」）

物理学科1年 高橋 幹

メリー・ウィドウ第3幕の最後、ニューグシュが四阿に置き忘れられた扇子を持ってきてから、ダニロとハンナが結婚することとなり大団円を迎える。この一連の流れから、ツェータ男爵とニューグシュによる狂言が背後にあったのではないかと推測した。それは以下の理由からである。

まずツェータ男爵は、いかにも間抜けなお人好しのように描かれているが、小国とはいえ公使の地位にあるからには、権謀術数に長けているだろうこと。次に、ヴァランシエンヌの不貞の疑惑を知っていたニューグシュが第2幕終盤まではそのことを男爵に知られないようにしていたのに、第3幕ではあっさりと妻の不貞の証拠たりうる扇子を持ってきたこと。さらに、男爵が扇子に書かれていた文字の筆跡が妻のものだと判断する時点でその書かれた内容も理解できただろうこと。以上の3つである。

特に2, 3番目の理由に関しては、それまでの流れからは自然に理解することができない疑問でもある。これらから、狂言の具体的な筋書きを組み立ててみる。

まず前提としてツェータ男爵はポンテヴェドロ公国の銀行にあるハンナの財産2000万フランを保持するために、彼女がポンテヴェドロの人間と結婚することを望んでおり、そこから秘密裏に彼女のことを調べ、遺言の内容やダニロとの関係を把握していたと考えられる。また、第2幕と第3幕の間にニューグシュから四阿でのやり取りの真相を聞き出したことも充分あり得る。すでにこの時にニューグシュに命じてその証拠の扇子を見つけ出したのだろう。更に、ダニロとハンナは互いに愛してはいるものの、ダニロが“*Ich liebe dich!*”と言えないがために結婚に踏み切れないことも、ハンナがダニロに手袋を投げつける場面の端に公使館職員が控えていたことから、彼を通じて把握していたと推測される。

これらの状況からツェータ男爵は、ダニロをしてハンナに向かって“*Ich liebe dich!*”と言わしめるためだけに狂言を考え出したのだ。まず最初にニューグシュに時期を見計らって扇子を持って来させる。男爵はその扇子を証拠に離婚を宣言し、そのままハンナに結婚を申し込む。ここでハンナの口から「亡き夫の遺言により再婚すると遺産がなくなる」という旨を言わせ、ダニロが何の問題もなく求婚できるような状況を作り出したのである。

この狂言には上述の二人の加担が必須であるが、第2幕と第3幕までの間に不貞の事実を知ったツェータ男爵とヴァランシエンヌとの間に一悶着があり結局は和解したことも考えられ、また、男爵とハンナはどちらもダニロとハンナの結婚を望んでいるという共通の目的を持っていることから、彼女ら二人、すなわちヴァランシエンヌとハンナとのどちらか、若しくはどちらも狂言に加担していた可能性も充分ありうる。

以上のような狂言が実際にあったとすると、ツェータ男爵が劇中で見せるどこか抜

けたような人柄は機略縦横の正体を隠す演技であるかのように見えてくる。そして物語の肝所であるダニロの告白は男爵の手のひらの上の出来事でしかなく、滑稽に感じられないだろうか。